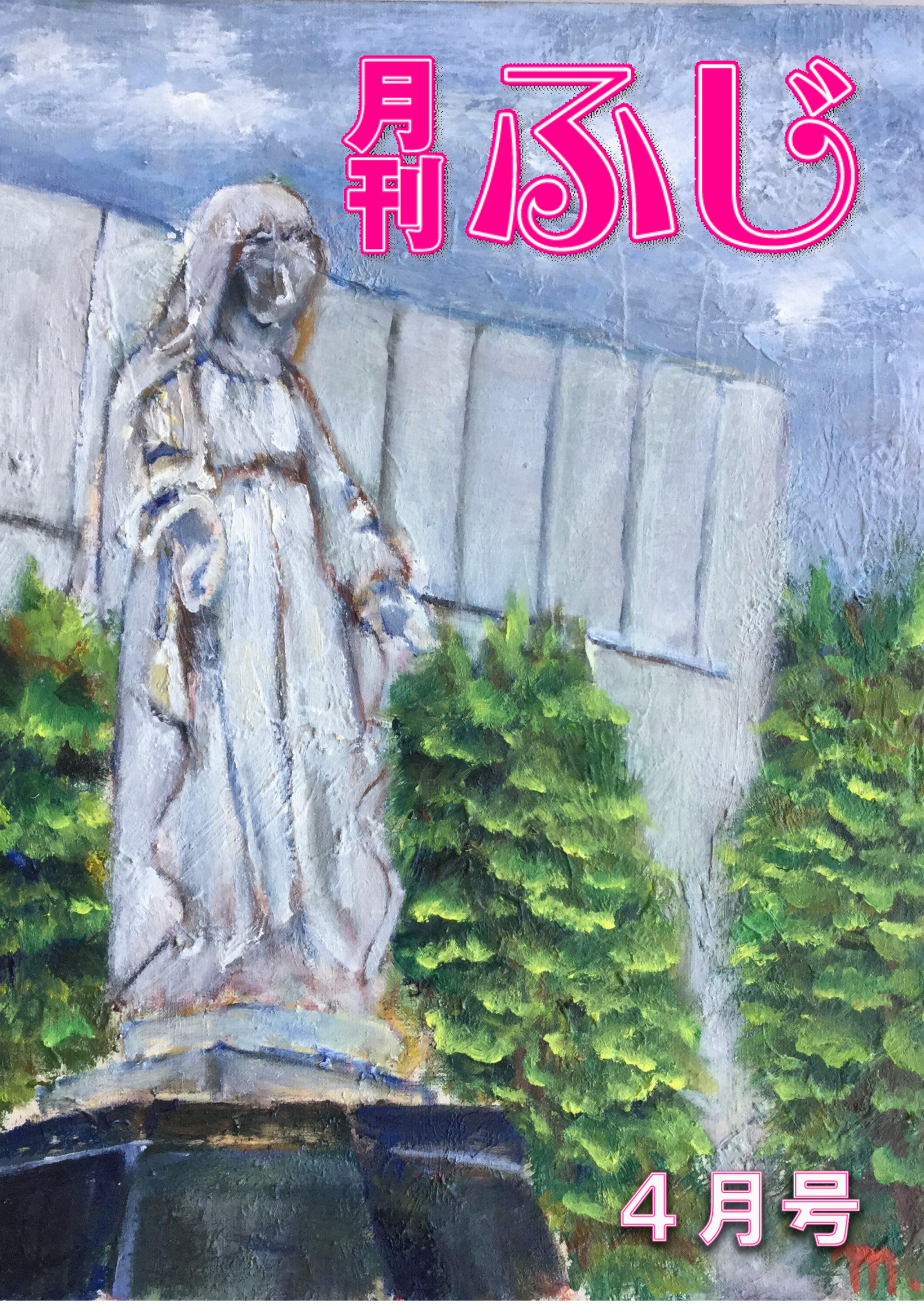
月刊ふじ



4月号

≪今月の表紙≫

高校３年　井上 美翔さん（高２時の作品）

今号の内容

【特集】

美術「中１　組木のインテリアパズル」
美術「高２　デッサン」

【新連載】

67 回生 齊藤百恵「アイルランド留学記」

「中1　組木のインテリアパズル」

木材を加工して、インテリアとして飾ることもできるパズルを作りました。色彩を使わずに、切り取った形だけで何かわかるようにデザインされています。やすりで丁寧に磨き、木肌を生かすワックスで塗装し、仕上げました。

Ａさんの作品

「３びきのこぶた」

Ｈさんの作品

「かがみもちなレッサーパンダ」

Ｔさんの作品

「運命の白鳥」

Ａさんの作品

「ねことみかん」

Ｓさんの作品

「ききゅう」

Ｈさんの作品

「小鳥の家族」

Ｕさんの作品

「クマの親子」

Ｆさんの作品

「ゆみこちゃん」

Ｈさんの作品

「がいすとわぁるど」

Ｎさんの作品

「ねこのたわむれ」

Ｔさんの作品

「女子会」

Ｉさんの作品

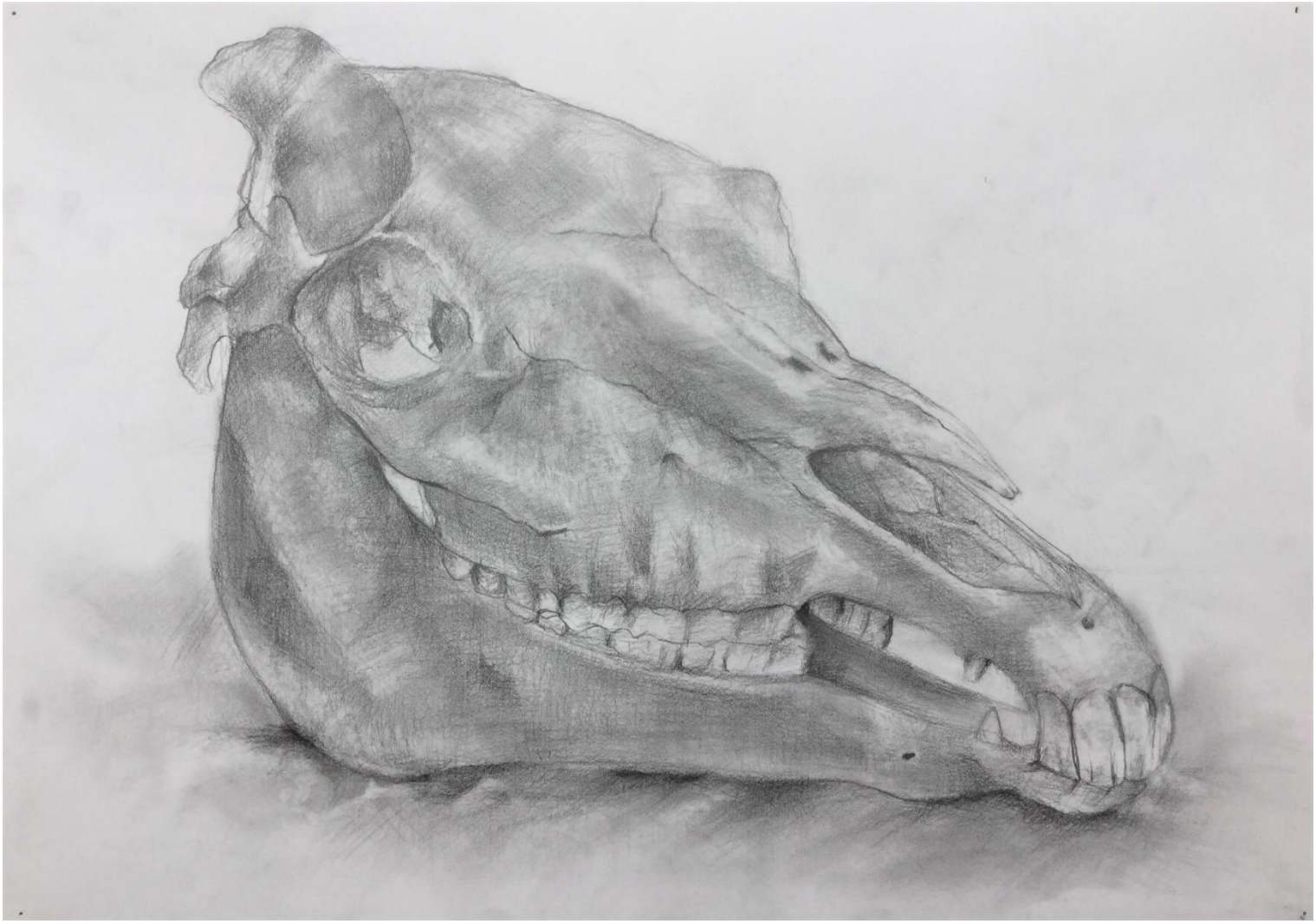
「にわとりの親子」

「高2　デッサン」

馬頭骨を鉛筆で細密に描きこみました。

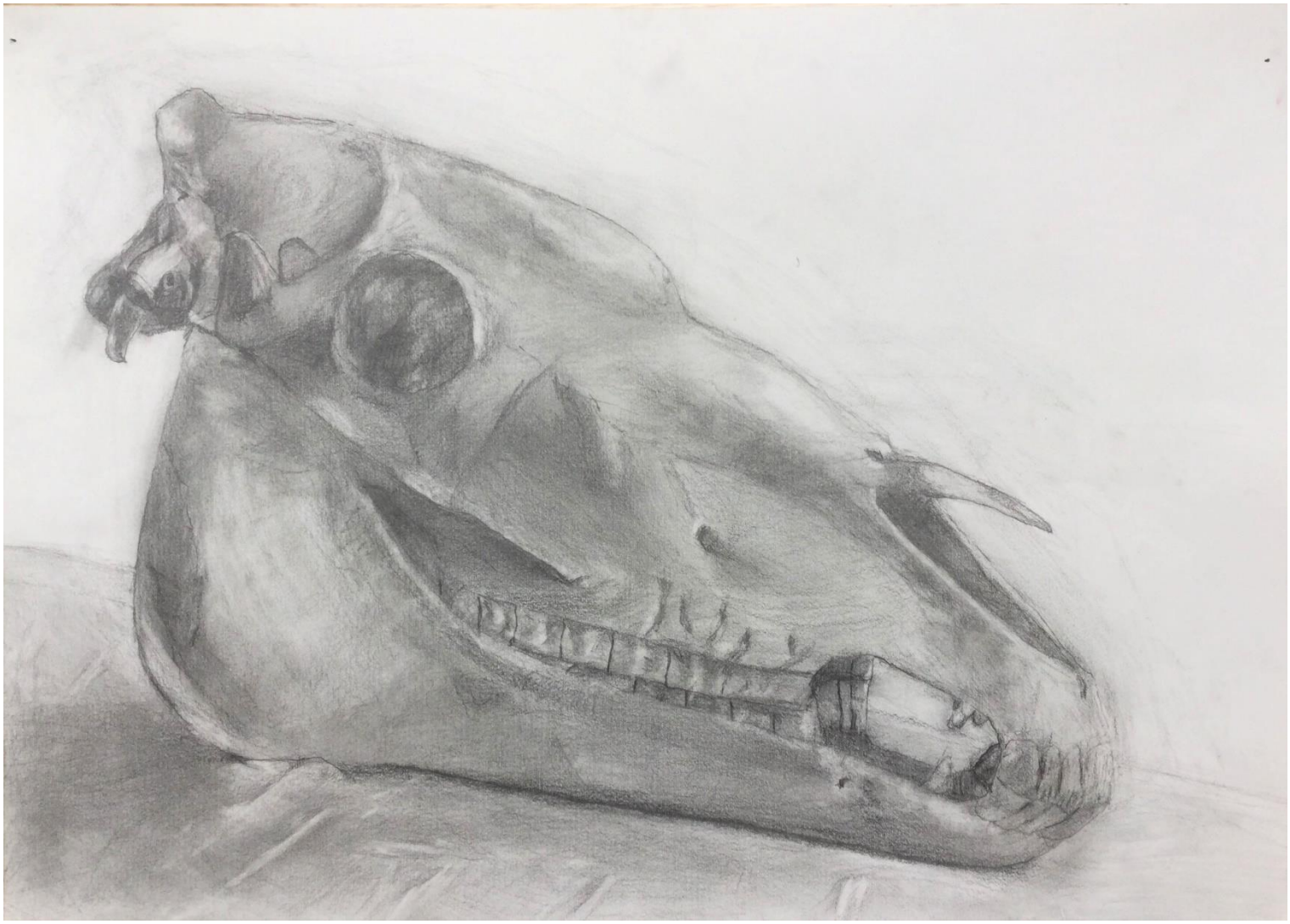
本物の骨！と聞くと最初はぎょっとする生徒たちですが、描いていくとなぜか愛着が湧いてくる不思議なモチーフです。

骨のもつ硬質で乾いた質感と、接地面の布の質感の描き分けがポイントです。

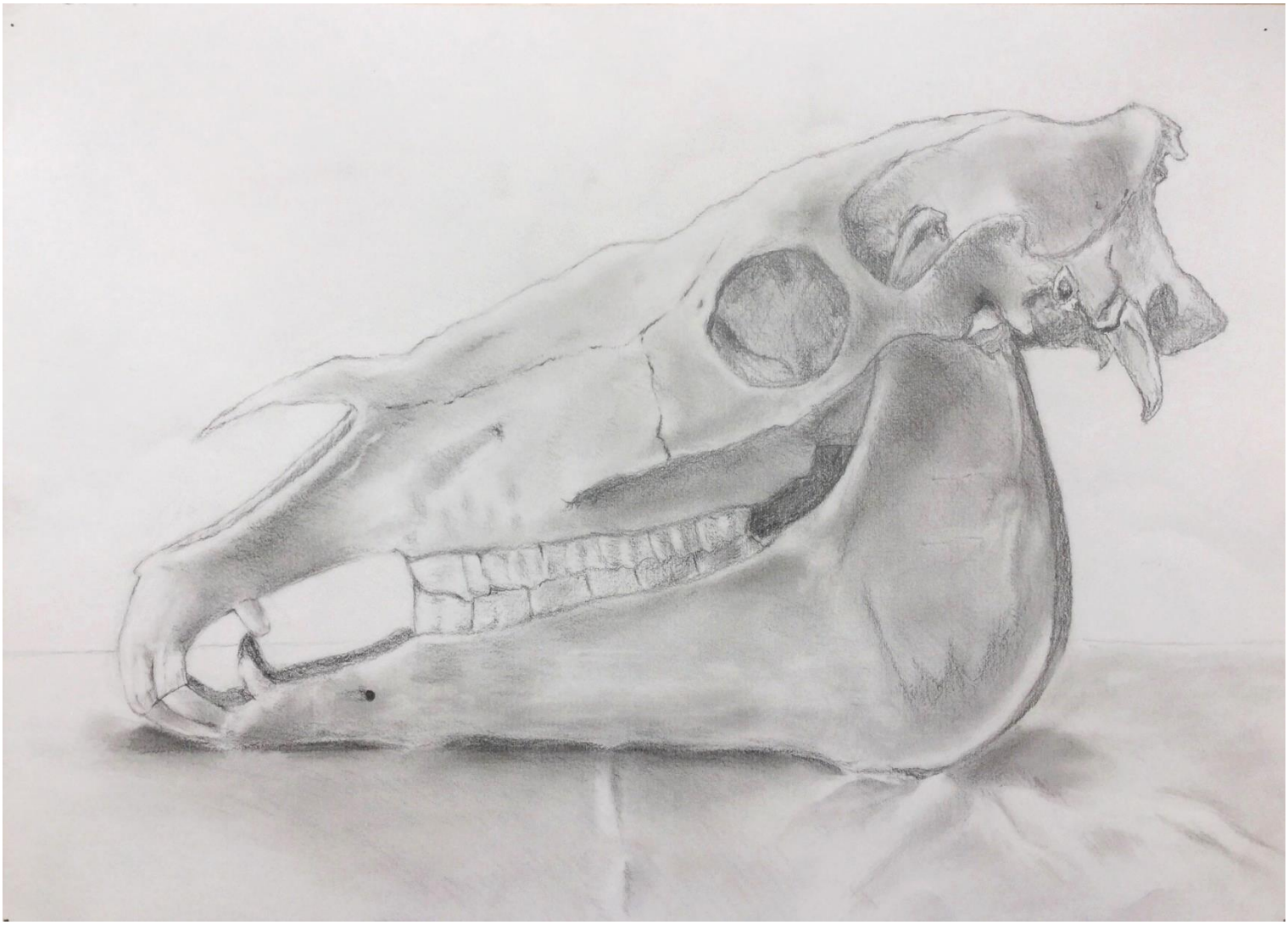


Ｉさんの作品

Ｉさんの作品



Ａさんの作品



Ｋさんの作品

Ｔさんの作品

「アイルランド留学記」

上智大学文学部新聞学科に在籍しながら交換留学生としてアイルランドのダブリンにある Dublin City University に通う、67回生の齊藤百恵さんの連載第6弾です。

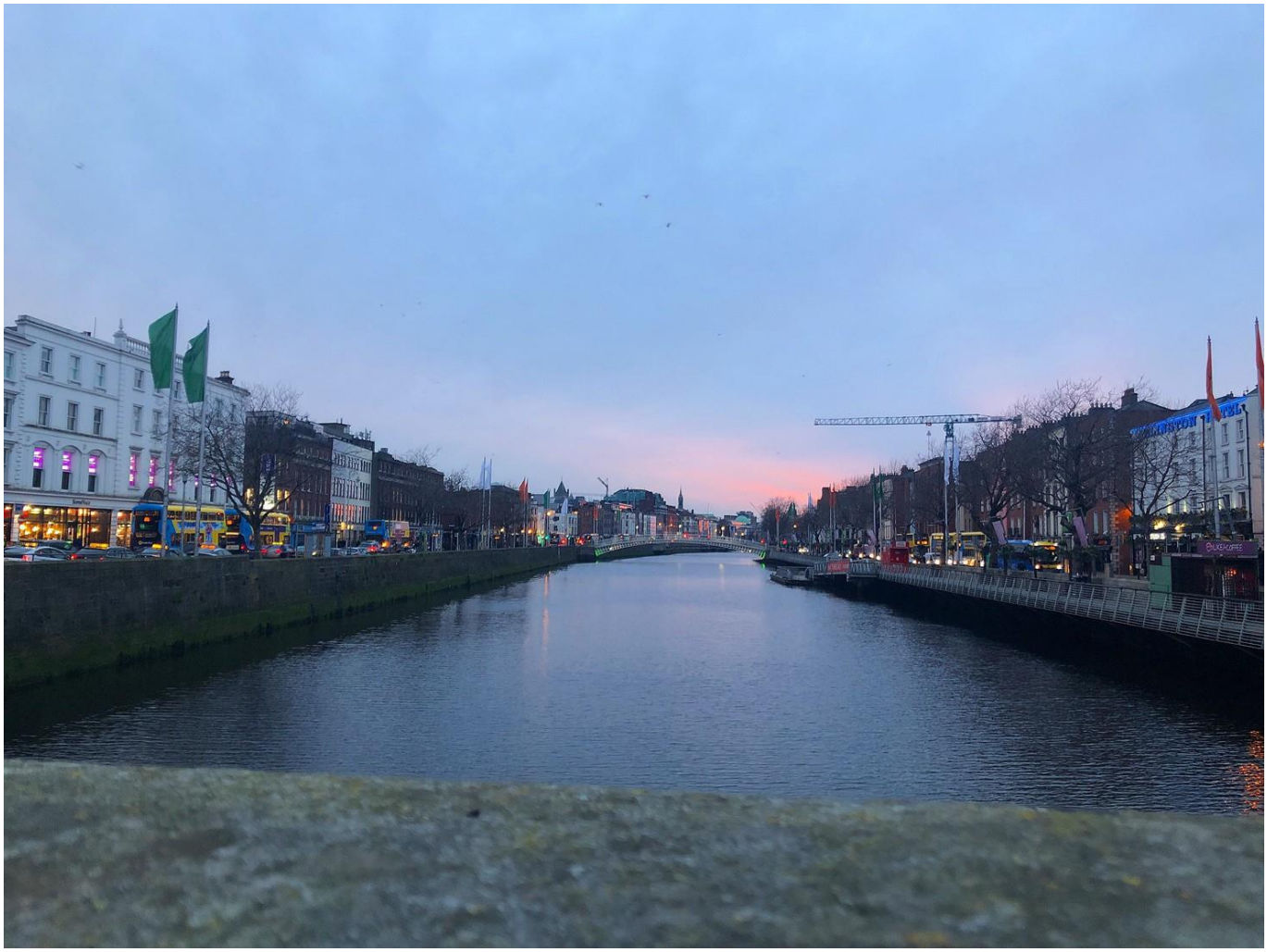
感染症の影響でアイルランドの学校が閉鎖になった頃、「アジア人」に向けられる目線が変わり……。

みずみずしい感性で「大切なこと」を考えた、圧巻の最終話！

こんにちは。

今回は皆さんにとても残念なお知らせをしなくてはいけません。今月でこのアイルランド留学記が最終回となってしまいました。新型コロナウイルスの影響により交換留学が中止されてしまったからです。

３月の初め頃まではアイルランドの感染者はたった数人しかおらず、ただ日本の状況を心配していただけだったのですが、中旬からイタリアを中心にヨーロッパで感染が拡大し始めました。12 日に全土の学校（大学も含め）が閉鎖になり、15 日にはパブも閉鎖（これはアイルランドでは大変なことです)。そのわずか 2 日後には上智大学から帰国するよう要請があり、やむなく日本に帰ることとなりました。

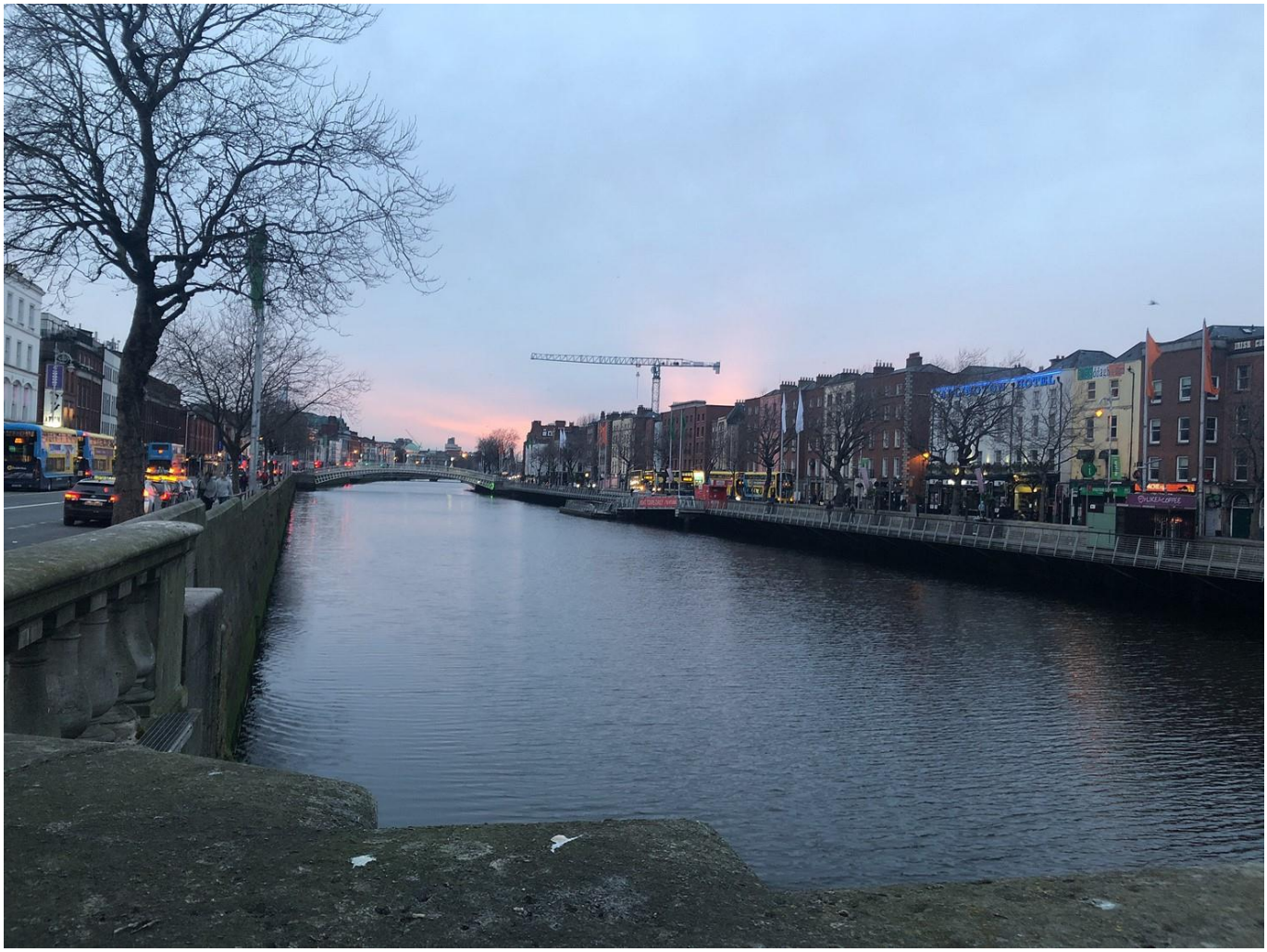


帰国前最後　ダブリンの街並み

あまりに急で、友人たちにお別れをすることもできず、しばらくは心の整理がつきませんでした。今も悔しい気持ちでいっぱいです。

正直、今回の留学日記は何を書こうかとても悩みました。帰国を決める前は、聖パトリックのお祭について書こうと楽しみにしていたのですが、残念ながらそれも中止になってしまいました。

そこで、最終回である今月は、海外と日本の両方でパンデミックに触れた私が感じた「差別」について書きます。残念ながら楽しいお話ではないのですが、最後まで読んでいただけると嬉しいです。



帰国前最後　ダブリンの街並み

「コロナウイルス！」

これは私がアイルランドの街を歩いているときすれ違った少年たちにかけられた言葉です。ちょうど、ウイルスの影響でアイルランドの学校が閉鎖になった頃でした。それまで私は、アイルランドで差別を受けたことはありませんでした。現地の友人はみんな親切で多様性に寛容な人たちばかりだったため、自分も現地にすっかり馴染んでいると思っていました。

しかし、2月ごろからその空気はすこしずつ排他的なものに変わっていくのを実感し始めました。日本人の友達が大学の寮で「日本に帰れ！」と罵倒されたり、他のヨーロッパの国でもコロナウイルスによるアジア人差別が横行しているニュースを耳にしたりするようになりました。

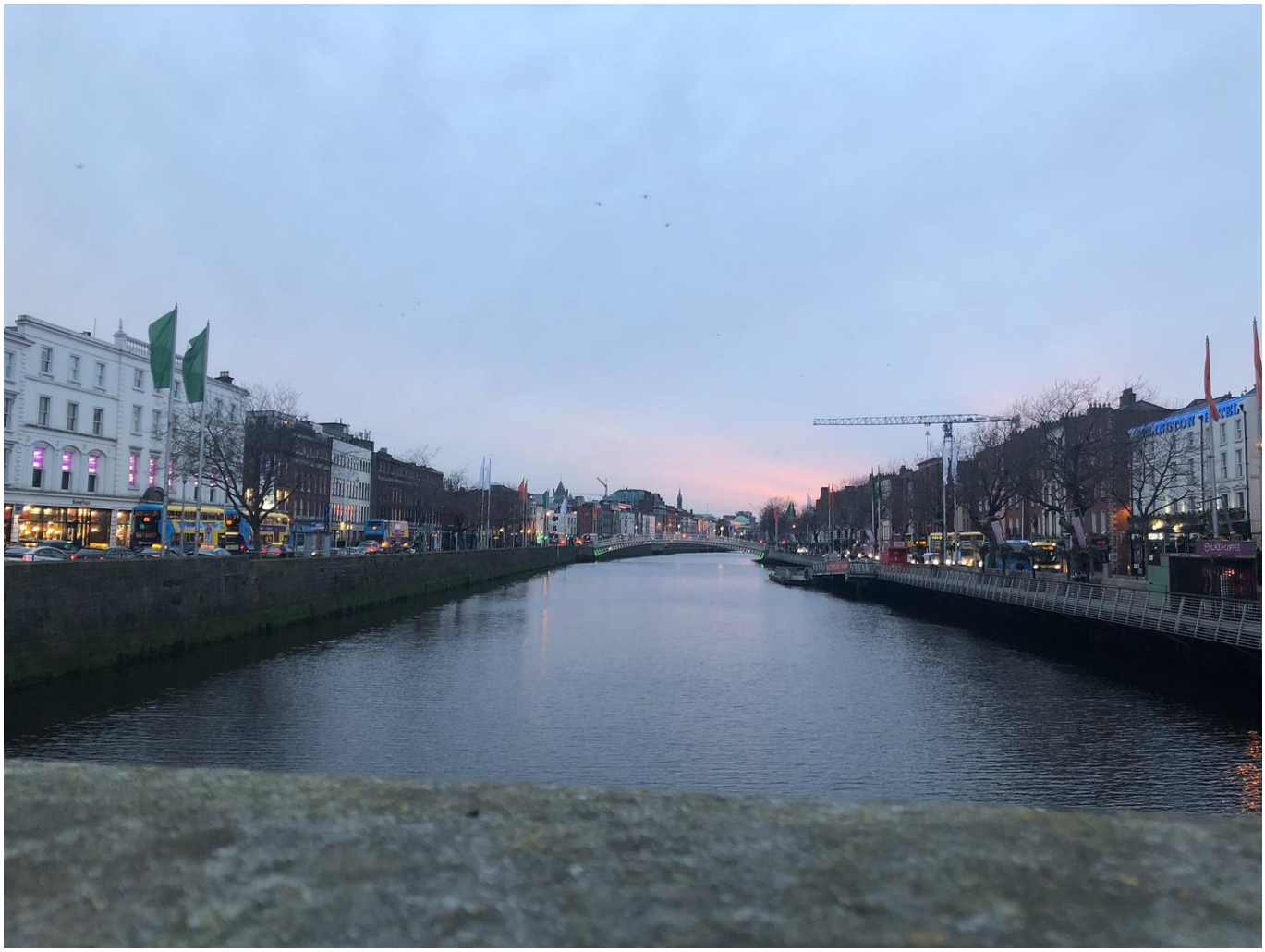
そして自分も「コロナウイルス！」と言われたとき、すっかり馴染んでいると思っていてもやはり自分は外国人（エイリアン）なのだと痛感すると共に、たった数週間でこんなにもアジア人（日本人）に対する視線が変わるものなのかと驚きました。

帰国前最後　ダブリンの街並み

帰国したいま、もうひとつ思うことがあります。それは「日本人とは何か」という疑問です。先日あるニュース番組で「日本人は高い民族性を持っているから自粛できるのだ」というコメントを耳にしました。ほかにも「日本人は秩序を守るから医療崩壊を起こしていない」「日本人は綺麗好きだから感染者が少ない」という意見を、テレビだけではなく日常生活の中でも聞くことが増えました(海外メディアでは日本の危機感の低さが報じられていますが…)。

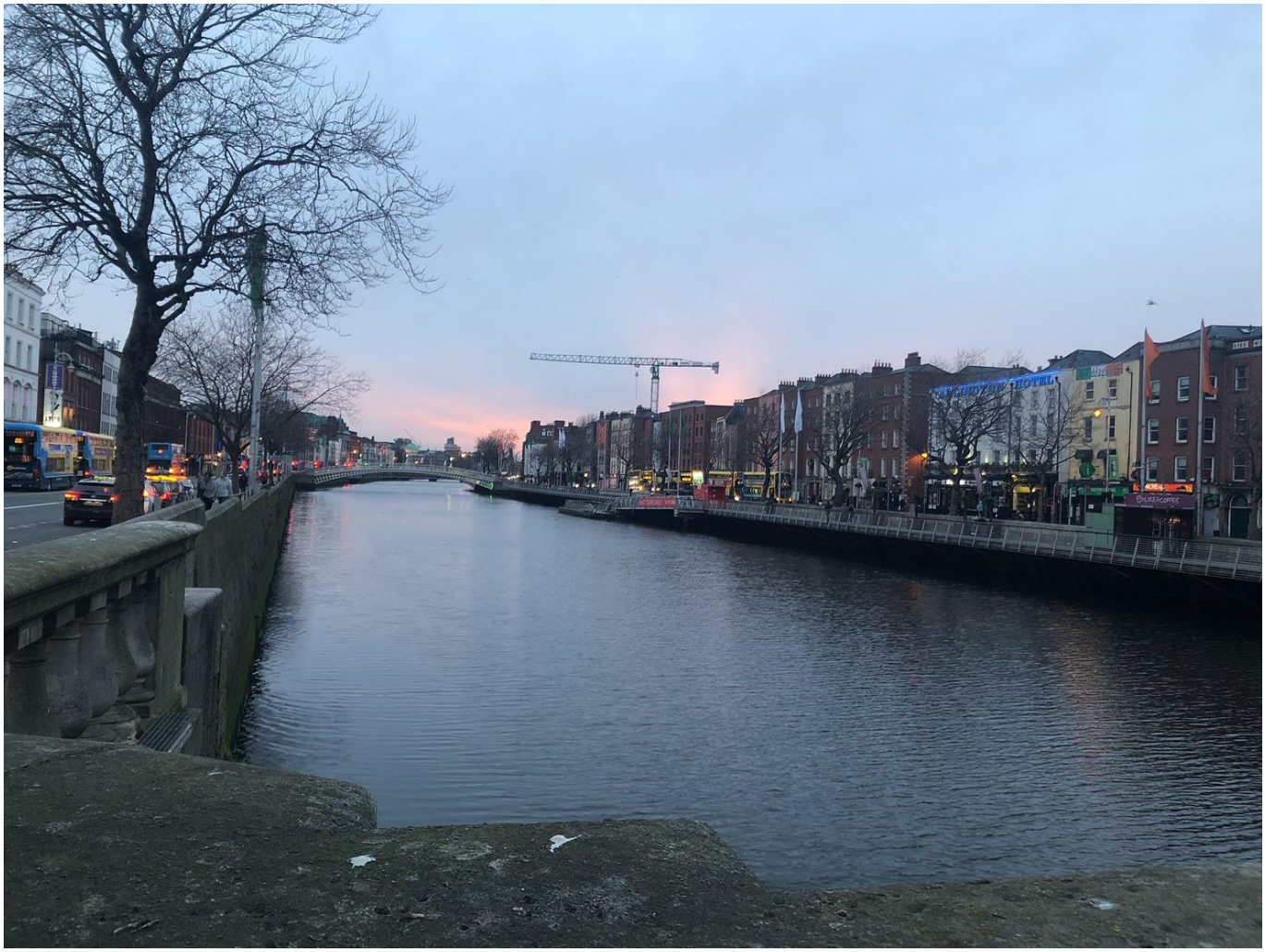
帰国前最後　ダブリンの街並み

しかし、ここで言う「日本人」とは誰なのでしょう。いま日本には様々なバックグラウンドを抱える人がいます。何をもって日本人とするかについては、国籍に限らずアイデンティティや人種など、様々な意見があると思います。では、このパンデミックの中で秩序を守り、高い民族性を持っている「日本人」とは誰を含み、誰を排除するのでしょうか。



帰国前最後　ダブリンの街並み

私たちは普段「差別はいけない」という意識を持っていると思います。しかし、この世界的なパニックの中で私が感じたのは、その意識がいかに脆く壊れやすいものであるかということです。たった数週間でアジア人に対する視線が変わったように、そして「日本人」とそれ以外を急に分け始めたように。



帰国前最後　ダブリンの街並み

　そもそも、ウイルスはかかる人を選びません。この問題は国籍や民族とはまったく関係のないものです。しかし、人は弱い生き物です。得体の知れないウイルスに脅かされれば誰かのせいにしたがるし、自分は大丈夫だと思い込みたい……。きっとこのパンデミックに伴う差別はこういう弱さが原因なのだと強く思いました。

帰国前最後　ダブリンの街並み

しかし、何度も言いますがウイルスは人を選びません。この問題を人種に結びつけることは全くもって無意味なことです。だから私たちは「差別はいけない」ということを忘れず、脆く壊れやすいこの意識を守っていかなければいけないのだと思います。

帰国前最後　ダブリンの街並み

今回の留学は、とても不本意な形で終わることになりました。しかし、これまで書いたような気付きがあったこと、そして日本だけでなく海外で過ごしたことで、より広い視野で物事を捉えられるようになったのはとても大きな収穫でした。この時期に留学をしていたことにもきっと意味があるのだと思います。

帰国前最後　ダブリンの街並み

この留学記の中で、留学に、そして素敵なアイルランドという国に少しでも興味を持っていただけたら幸いです。ありがとうございました。

どうか皆さんが健康に過ごせますように。

齊藤百恵

齊藤百恵さんの「留学記」は今号で最終回となりましたが、次回、番外編の「旅行記」を掲載いたします。

おたのしみに！